

■ 春の公開講演会

## 強い思いとつながる力

—セーラ流 変革推進のための人間関係論—

2011年7月3日(日)

14:00~16:00

南山大学 名古屋キャンパス D棟

**セーラ・マリ・カミングス** 氏

(株式会社榊一市村酒造場 代表取締役、  
株式会社文化事業部 代表取締役)

**司会(グラバア)**：今日の講演会の講師、セーラ・マリ・カミングスさんをご紹介します。

セーラさんは、アメリカのペンシルベニア州のご出身で、今日もお話ししていらっしゃるのですが、大学町で育ったので、南山に来て、どこかちょっとアットホームな感じがするとおっしゃってくださいました。

1998年に、長野県で冬季五輪オリンピックがございましたが、そのときに大学を卒業して間もないセーラさんは、オリンピックを通じて日米両国にクリエイティブな貢献をしたいという思いで、そのまますぐ日本にいらっしゃいました。そして、今日に至るまで、最初の願いにたがわない活動をしていらっしゃるなあと私は感じました。現在は長野県の小布施町というところで、代々お酒を造っている榊一市村酒造場の代表取締役をしていらっしゃいます。本当にいろいろクリエイティブなことをなさっていらっしゃる方なので、いくつかご紹介したいと思います。

1998年、冬季オリンピックをきっかけとして、「第三回国際北斎会議」を企画・運営なさいました。そして、2001年には、日経ウーマン誌が選ぶ「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2002」大賞の受賞ということもございました。

また、最近では、NPO法人桶仕込み保存会設立代表及び地域づくり総務大臣賞個人賞受賞というような実績があり、本当にいろいろなところで認められているという方です。

私は、父母の出身地が小布施町に近いということもありまして、今日セーラさんのご経歴をご紹介することになったのですが、セーラさんの本を読みまして、すっかりセーラさんのファンになってしまいました。

セーラさんが日本へ来ていろいろな提案をするのですが、全部「だめ」、「そんなの無理」と言われ続けるわけです。しかし、セーラさんにとっては、自分

の提案は新しい視点なので「だめ」、「無理」と言われるのは当たり前だと考えて、そう言われれば言われるほどやる気がわいて、そこから動き出して実現に向かっていくところがとてもすてきなあとと思いました。私はそんな気概をかなり昔に置き忘れてきてしまったなあと、とてもファンになりました。

日米の違いの中から、セーラさんが日本にいろいろなものを貢献してくださったということですが、ご本人がおっしゃらないかもしれないので、一つだけご紹介させていただきます。

「蔵部（くらぶ）」のお話はきっと出てくると思うのですが、蔵部に限らず、古い民家、昔ながらの建物で、木の梁（はり）と土壁にはどうしても昔ながらの瓦が必要だという状況が出てきたのだそうです。普通の人は仕方がないとあきらめたり、あきらめない人でも全国から古い瓦を集めようかということになるわけです。でも、セーラさんの発想は、「じゃあ、私たちが瓦を焼きましょう。古いやり方で焼きましょう」というように動いていらっしゃる。そういうところがとてもすてきですし、日本人がうっかりすると置き忘れていた大切なものを、セーラさんからたくさん教えていただいているなあと感じております。

私も早くセーラさんのお話を聞きたいので、ご紹介はこのぐらいにさせていただきます。セーラ・マリ・カミングスさん、よろしく願いいたします。

**セーラ・マリ・カミングス:**皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました、セーラ・マリ・カミングスと申します。どうぞよろしく願いいたします。本来なら印半纏（しるしばんてん）を着るところですが、ちょっと暑いのでお許しいただきたいと思います。

大学にすることが非常にうれしいです。大学の町に生まれ育ち、自分の生まれ育った町の名前が「State College」で、「州立大学」という意味なのです。「州立大学のある町は分かるけれども、町の名は？」とよく聞かれるのですが、名前もそのまま「State College」という名前、ペンシルベニア州立大学のある町です。父が電子工学を教えていたためにそこに生まれ育ち、大学も同じ町の大学（ペンシルベニア州立大学）に入りました。

途中で日本人と出会ったのが、大きな転機となりました。東海岸のペンシルベニアは地球の裏の、ニューヨークとワシントンDCの間にあるのですが、どうしてもヨーロッパのほうに目線が行ってしまっていたのですが、私はアジアに興味を持っていましたので、大学時代に中国語と日本語のどちらかを勉強したいと思って、両方の授業を受けに行きました。

それで、一つは日本人の先生がよかったことと、もう一つは同じ日に、初めて授業を受けに行った日の午後に日本人と出会って、すぐに友達になったので、やはり日本語を選ぶことにしました。大学そのものが4万人以上の大学生がいるところで、大学院と博士、研究員まで入れると5万人程いるので、もう「ゴマンと」学生がいるわけです。自分の個性を見出せないとなかなか難しいということで、みんながヨーロッパのほうへ行くなれば、私はむしろアジア、

日本へ行きたいという気持ちがわいてきたのです。

「にっちもさっちもいかない」(英語では「being driven into a corner; having no way out」)とき、どうしたらいいのか。私はそのときに「ニッチマーケット (niche market)」と考えて、niche (すき間)を見つけるわけです。ですから、「にっちもさっちもいかないときはnicheへ行け」ということだと思っていますが、やはりなかなか通じにくいところがあります。「niche」という言葉を知らない人は後で調べていただければと思います。一応ドイツ語から来ている言葉です。

みんながやろうとしていることをあえてしないで、むしろオンリーワンの道を目指すべきではないかと今も考えていますが、もともと左利きであるので、みんなが右へ行こうとすると私は左へ行くということもあります。でも、左ききだから左党になったわけではなくて、日本酒が好きなのです。私は政治の道は全く興味がありません。むしろ、自分たちが自分たちの国のために何ができるのかということに興味があります。

ケネディの言葉に、「Ask not what your country can do for you. Ask what you can do for your country. (自分の国が何をしてくれるのか聞くのではなく、自分が国のために何をできるかを考えなさい)」という言葉があります。子どものころからこの言葉が心に響いているので、どこに行っても、自分たちが何をできるかということ、人のことではなく当事者意識を持って、自分たちのこととして受け止めていくようになりました。

このキャンパスはとても緑の多い、美しい大学だと思いますが、State Collegeも100年も前の木が傘のようになって、建物が目立たないような緑色の豊富なところでもありますし、森と山があるのですが、大体ボランティアの集団によって守られています。でも、ボランティアだからといって決して中途半端ではなく、ちゃんと循環型社会を考えて守っているわけです。

自分の生まれ育ったふるさととは、夏になると暑い時期ではあるのですが、普通は3万8000人だけの人口のところに20万人ほどがArts Festivalというお祭りのためにやって来ます。アメリカの東海岸のあちらこちらからアーティストとかいろいろな方々が、自分の作ったものをその場で展示して、その場で売りますが、一番のメインストリートをなんと1週間ふさいでしまうことになります。朝の早い時間と夜の遅い時間以外は通ってはいけない道になっています。

この後はまたマラソンの話とかいろいろなお話をしたいのですが、絶対に自分が当たり前だと思っていたことも、普通だったら警察がOKしないと行政がOKしないとか、いろいろな壁があるのですが、むしろ生まれ育った環境で協力体制をうまく作ればWin-Winができるんだという背景があったわけです。一番誇れるところ、自分の生まれ育った町が、学校の周りに門はあるのですが塀はありませんので、地元の方々が生活空間としてキャンパス内を歩いたり、かなり地元の人々と学生の交流が盛んです。また、南山大学もコミュニティに

溶け込んだ大学ですので、こうしたオープン講座が一つのきっかけになるとは思いますが、ますます身近になるような、町に密着した大学を目指していただきたいと思います。

私の母校は図書館が24時間運営されていましたので、よく親に「図書館へ行ってきます」と言って何時でも行けました。日本だと5時に閉めるところが多いので、同じ施設でも少しの融通が利くことによって、もっといろいろな使い道ができるのではないかと考えています。

最近、小布施は「まちとしょテラス」というところできて、やはり夜8時ぐらいまで使えるようになっていきます。24時間まではいかないにしても、夜の時間帯まで開くので、1日300人ぐらいが小さな町の図書館を使っています。

ちょっと余談になりますが、普通は図書館へ入ると静かにしなければなりません、それもおかしいのではないかと考えるのです。むしろ、図書館へ来て、いろいろな情報を大いに交換するほうがいいのではないかとということになり、かなりにぎわいのある、飲食も許される珍しい図書館で、人の交流の場ができているということです。一番は異文化交流の場ということ。同業者もいれば、異業種の方々も集まる場所から、新しい変化のチャンスが生まれてくるように思いますので、その集いの場を持つことは大事なことだと思いますから、今日が一つのきっかけになればと考えています。

たとえば、この大学の図書館をより一般の人に公開するとか、あるいは夜遅くまで開くとか、生意気なことを言っているかもしれませんが、たいてい生意気なことを言うので初めにお許しをいただきたいのですが、少なくともそのような背景に生まれ育ったので、今はたとえば施設は随分整えてきたし、建物は立派なのがたくさんできていますが、機能するものを工夫すればもっともっと充実していくことでもあります。

たとえば、自分の大学では朝5時から泳げますので、仕事に行く前でも、学校に行く前でも、夜の12時ぐらいまで泳げます。いくつかの例しか挙げていないのですが、施設は充実しているけれども、スケジュールや時間帯がそうでもないということがあります。運営する立場に立って考えると、どうしても狭くなっていくのですが、もっと協力体制を広げて考えると、逆にできることがあります。

今日は映像を持ってきたので、それを見ていただきながらまたお話をさせていただきますと思いますが、とりあえず「異文化交流」といっても、言葉は一緒でも背景が違いますので、日本人がどうしてもできないと思ってしまうことが、ほかのところではできることがこっちにできないはずがないとか、同じことではないにしても、どこまでやりたいかということが違うんだと。半信半疑で、どっちへ転んでもいいように何かをやろうとするとたいていうまくいかないのですが、何かをやりたいと思ったら、思い切って全身全霊で進めば、意外とできるものが多いと思います。

「失敗は成功のもと」とも言われるのですが、どちらへ転んでも、前向きに転べば前進だと思います。何かやるときは、仮にこけたとしてもただでは起きない、必ずそこから勉強になって、次のときに生かせると思います。特に、日本人はすばらしい考えを持っている人がたくさんいますが、もしうまくいかなかった場合はどうするのか、失敗を恐れて動こうとしなくなってしまうことがあります。

私の場合、何かをやるときは、一人でも喜んでくれれば、一人のためにでも違いができれば大いにやるべきだと思いますので、ちょっとの違いが大きいのです。少しずつの違いが積み重なれば、大きなことにもつながると思います。「一滴の水から波となる」ことですので、一人一人、自らの動きがやがて波となると思っています。たぶんアメリカ人は、個人からできることを考えていくのですが、日本はグループなのです。本当はグループができればそのほうが、効率がいいのかもしれませんが、経験上、全員が最初から分かってくれることはありませんので、1人から2人、3人、4人、5人と少しずつ核となるところから動き出すと、ある程度何をやりたいのかが見えたところで、いろいろな人が参加できるようなかたちになっていくと思います。コンセンサスを得ることは、最初から全員OKになるということではありません。結果として分かってくる、後から分かってくれたりすることが多いと思います。やってみなければ分からないということが多くありますので、できることからやるということです。

日本に初めて大学の交換留学生として来たときは、親が反対しまして、「日本へ行くな」と言われたのですが、「どうして?」と聞くと、「普通の国へ行ってくれ」と言われました。普通の国とはいったいどこだろうか。やはり、どうしても人は自分のよく知っているところに親しみを感じます。たとえば先祖がヨーロッパのほうから来ているので、ドイツとかイギリスとかもっと近いところを思ったのですが、普通の人は普通の国へ行けばいいですが、私は別に普通になろうと思ったことはありませんので、特別な国を選びたいと思いました。ある人にとっては水を差す言葉が、自分にとってはむしろ火に油を注いで、もっと決心を固めたぐらいです。それで、当時は親がお金を出さないということになったので、親がお金を出さなくても、アルバイトをして貯金をして、すべて日本に来ることにかけることにしました。

なかなか大変だったことは間違いのないのですが、誰のせいでもなく、自分の選んだ道ですから、一歩ずつ前向きに進むしかないと思いました。決して楽をしたことはなくて、人が自分の夢を分かってくれないとか投資をしてくれないということで、自分自身で予算を作って、すべてをかけて日本へやってきたので、失敗しても簡単に帰るわけにはいかないなあと思いました。

大学時代でも、自分の夢を途中で投げ出してはいけないと思い、1年だけではなかなか日本語をマスターすることは不可能だということに気付いたので、まして学生時代には不自由がなくても、社会人としてやっていくには日本人で

もハードルが高いので、なおさら自分にとっては壁に近いものがありました。

長野オリンピックが1998年に開催されることが決定された後に一年間の留学を済ませてアメリカへ帰って、大学を卒業する前に、たまたま日本人20名ぐらいと飛行機の中で出会いました。ニューヨークからワシントンDCまでは大体50分足らずですが、そこでオリンピックの話で盛り上がりまして、日本語で話をしてみたら、熱意を持っている若い方がオリンピックのときに長野に必要なという話になって、いきなり2週間後、長野まで面接に呼んでいただきました。

誰も知っている人がいない信州で、5年間もオリンピックの準備のためにやっていたのだろうかと思ったときに、最初は交換留学生として日本に来ることを親は猛反対していたのですが、自分の目を通じて日本を知ることができたので、オリンピックの仕事をできるチャンスは一期一会ですから、そのチャンスを逃せば後で後悔すると、反対していたのに、逆に真っ先に応援してくれるようなかたちになりました。大体、反対する人と賛成する人は、どちらも熱い気持ちがあるのは間違いないことですので、私はむしろ、どちらでもいいと思うことのほうが困ると思っています。

親から、「いつでも帰ってくればいいから、だめもとで頑張ってください」と言われたのですが、もともと私は長距離選手だったので、途中で目標をあきらめられない、あきらめが悪いかもしれないのですが、オリンピックが終わるまでいることに決めました。

1994年にリレハンメルオリンピックに行くことになったのですが、そのオリンピックで一番感動したのは、スポーツ競技ではなく、町民の方々が誇りを持って一生懸命自分たちの町の文化を世界と分かち合っている姿でした。マイナス20℃ぐらいの寒さの中で、5分でも外にいと手も足もかじかんでくるぐらいの寒さだったのですが、おもてなしの温かさで、その寒さを溶かしてくれるようでもありました。

では、映像をお見せします。

それから長野に戻って、やはりオリンピックの手伝いをするのであれば、もっと民間から日本の文化のすばらしいところを世界に紹介できればいいなということで、元上司に今の会社を紹介していただきました。紹介していただいたといっても、電話番号だけ教えてくれたので、今の時代は紹介する人が入ったりすると、逆に難しくなることもありますので、直接電話をかけてみました。

もう今から20年近く前なのですが、当時は英語で話をする人があまり電話をかける時代ではなかったもので、本当は日本語で話をしていただけにもかかわらず、外国人であるだけで対応する人はあがってしまいまして、すぐに社長につないでいただけました。それで、たまたまその日は社長の予定が空いていたので、長野から小布施まで17キロぐらい離れているのですが、すぐ自転車で行きました。

日本に来る前から「日本はこういうところだろう」と想像していたような町

が小布施町で、日本のふるさとの町が今日まで残っているというのに非常に感動を受けました。やはり、周りを見れば見るほど納得できるものがたくさんありまして、昔の200年～300年前の蔵もあれば、20年～30年前に建てたものもあり、昔のものと今のものが両方生かし合える、やはり建物と建物の間（ま）が一番大切であることを教えていただきました。「ノートとノートの間の空白が音楽を作ってくれる、町もそれと一緒にだよ」というふうに言われて、やはり日本には知恵が残っているんだ、生きているんだということがすごくうれしかったです。

せっかくですからオリンピックに向けて、なくなってきた日本の職人さんのいろいろな技に新しいスキルを加えることによって、生き返ればいいなあと思いました。それで、最初に五輪の傘を作りたいと考えて、大使に提案しましたが「だめだ」と言われました。そこで、職人さんに提案したら、「昔はできたけれども今はできない」という返事でした。

職人さんたちのところは、どうしても発信地でないと死んだ文化になります。オリジナリティーを、どんどんと新しい発展を求めていくのが生きている文化になるので、コピーだけで満足してはいけません。オリンピックのときには断られたのですが、やればできると信じて、5回ぐらい会いに行き、職人さんはもう、「断るよりやったほうが早い」と、「いつまで来る気だ」と言われました。

そこから国際北斎会議を提案して実行しました。そのときポスターをデザインしてくれたのは、もう亡くなられてしまいましたが、田中一光先生という有名なグラフィックデザイナーでした。青山にあるアトリエの門をいきなりたたいて、北斎は日本を代表する作家ですから、国際北斎会議をオリンピックの年にやりたいので、どうかポスターをお願いできませんかと頼んだら、ひとことでOKしていただきました。しかし、傘を作るときは、結局、職人さんにはできない理由がたくさんありました。一番の理由が役割分担だったのですが、たとえば一番上の油紙を作るのは一人だったり、うるしを塗る人はまた別だったり、紙を張る人、糸を染める人も皆バラバラでしたが、逆に言えば、バラバラだったので非常に美しい、すばらしい、クオリティの高いものがキープできていたわけです。

ただ、今では、20年前に頼んでできたものと同じものは、日本では作れなくなってしまっているので大変寂しい限りです。でも、寂しいと思うなら、そのままではなく、どうすればまたできるのかということです。

最近では京都に行くと、傘職人さんも、30代ぐらいの若い人が誕生しています。うれしいことに、その人が照明器具を作っていて、傘の技を生かしながら新しいイノベーションを加えたから、傘の職人も修理も可能となっているのです。やはり、古い仕事だけでは、今は蛇の目傘や番傘をさしている人は少ないので、照明とか新しい商品を作ることによって、古い伝統文化が初めて生きようような体制になります。そのような事例があります。

ただ、会社を説得してもOKがもらえなかったのですが、せっかく職人さんとはやるという約束だったので、また貯金を全部崩して発注することを決めて、今日参加している人数以上の傘を一度に注文しました。今から思えば本当に貴重なもので、当時より傘の値段も大体3倍ぐらい上がってきていますし、同じものを今はもう作れないのですが、何をやるにしても、自分が大事に思っていることでほかの人がその大事さを分かってくれないなら、限りはありますが、精一杯、限界までは自分が投資してまでもやると決めて、実行しています。

傘が届いた日に、みんなが驚きました。一斉に傘を開くと、本当に神秘的な世界が生まれてきれいでした。「あっ、こういうことだったんだ」と、どんなに説明してもなかなか言葉だけでは分かってもらえませんでした。できたものを見て、初めて「なるほど」ということになりました。一つの成功、ささいなことではあるのですが、ささいなことから物事が変わってくるので、傘ができると思っていなかった人たちに、今度は北斎会議をやりたいと思って提案すると、「ひょっとしたらできるのではないか」という前向きな流れができるようになりました。

私は関西外国語大学で勉強していた1年間がありますが、その当時は、お金が本当にありませんでした。でも、お金がなくても言葉で楽しめるのが、想像自体に喜びがあるものだということです。吉本興業にもはまりまして、あるときなんばの新喜劇を見に行き、チケットを売っている女の子に「私は交換留学生ですけれども、あまりお金もありませんから、月に何回も来たらちょっとまけてくれませんか」とお願いしました。「あかん、あかん」と、すぐだめだと言われたのですが、同時にマネージャーが後ろから「おいでおいで」と言ってくれて、真ん前の席を取っていただいたり、楽屋へも案内していただいたりしました。物事は、どっちみちできないに決まっていることも、だめもとでやってみると、毎回はうまくいかないにしても、たまにはうまくいくこともあります。

私は、よく「だめだ」と言われるときは、「だめ」は動かない状況です。「バツ」と言われたときに、思い切って前向きに走ればプラスになるので、どこまで前向きに倒せるかということがあります。昔、陸上部をやっていたときに、コーチが体力はどのくらいあるのか、精神力はどのくらいあるのか、まだ高校生ぐらいのころでしたが、マラソンをやるにはかなり体力が大事ではないかと思っていたのですが、違っていました。95パーセントは精神力、残りの5パーセントは体力だと言われたことを覚えています。大体仕事のハードルをクリアしていくときは、どこまでやりたいかが重要になってくると思います。

日本は、特に周りの目を気にしてしまうことが多いと思いますので、自分の考えを大切にすべきところを、周りがどう考えるのかを心配してしまうのですが、周りに「だめだ」と言われるときは、受け止め方次第でよくなると思います。ですから、周りの反応は、受け止め方によって良くなるか悪くなるかというの



は相手が決めることではなく、自分自身が決めることです。私の場合は、欠点と思われるところは、むしろそれは土台だと考えて、そこが出発点と考えるので、いけないと思われることをプラスにすれば、同じことが丈夫になることで、いけないと思わないままでプラスに工夫すればよくなることです。

「だめ」はひらがなで書くと点々が付きますので、点々が付くと「だめ」になるけれども、その点々は自分からすれば、手を上げた状況は点々が付くけれども、同じことでも手を上げさえしなければ「ため」になると。ですから、自分が精神力でどこまでやりたいのか、人にどうのこうのと言われても、このままでいいのかと。このままでいいならいいのですが、ただ、これからの世代がますます大変になってくる中で、「まあまあ、こんなところにしておきましょう」では間に合わないわけです。それだったら、もっともっとできることを精一杯やって、お互いに条件は同じですから、やはり一度しかない人生ですから、今日は今日しかない、明日は明日しかないわけですから、今日の精一杯、明日の精一杯、できるところからやっていけば、気付いたらそれがすべてではないかなと。それ以上のことはできないし、できることを精一杯いつでもやっていけば、後から悔いは残らないと思います。

日本では「出る杭は打たれる」とも言われるのですが、私はやはり悔い（杭）の残らない人生を送りたいと思います。自分が納得できることのほうが大事だと思っています。私が北斎会議を提案したときは、誰もできるとは思っていませんでしたが、オリンピックが1998年にあるということで、実は1990年と1994年にイタリアのベネチアで国際北斎会議が開催されていることが分かりました。そうしたら、第3回は日本で、小布施でやりたいと考えて、世界の学術会議があったので、そのリーダーであるイタリアやイギリスやアメリカの教授のところを回って、合意したところで、ぜひ小布施で北斎没後150周年をオリンピックの年にやりましょうということになりました。

せっかくなにかがあったら、できるだけ人と分かち合ったほうがいいですし、大変なことがあると、できるだけおんぶしたほうがいいと思います。それで町に提案をして、一緒に企画も運営もしましょうとなったときに、目を見ると確かに国際化する必要があるんだなあと素直に考えていただいて、やはりやりましょうということになりました。

ただ、提案したときに想像していたものよりは、出来上がった会議のほうがはるかに想像を超えていました。ですから、よく人は、「どうせ自分はそこまでできない」とか「力がない」と思っても、目標を高く設定して、むしろ足りないところは、自分たちがどんな組み合わせを加えるとできるのかを逆算して考えたほうがいいと思います。ただ、そのとき提案をしなければ実現もできなかったことですので、気付いたことからどんどん言う必要があると思います。

よく社長から、「日米摩擦より、我が社のほうがはるかに大変だ」とよく言

われた覚えがあります。摩擦が起こると熱くなる、熱くなると今度は変化できるチャンスにもなります。日本では議論を避けてしまうところがありますが、むしろアイデアを分かち合えることが許される環境が、一番磨くことができる、思った以上のことができるようになるので、逆にけんかになることも当然ありますが、「どっちでもいい」と思っているとけんかにはならないわけです。大事だと思うと、どんどん気持ちがちどこかで衝突してしまうこともあります、私は衝突するのは悪いことではないと思っています。むしろ、それはプロセスの一部ですから、もしけんかをするのであれば、プロジェクトの途中のほうがいいと思います。出来上がったものは、みんなが納得できる、あるいは、想像以上のものができるほうがいいと考えています。

結局、北斎会議はオリンピックの後にやりましたが、オリンピックの1年前の1997年にアジアの株が暴落したときがありました。リーマンショックはさらにショッキングだったのですが、当時、アジアの株が暴落したときも、かなりみんな「どうなるのだろうか」と不安心理が働きました。歴史から学ぶと、経済の中には当然波があるわけですから、そのダウンしたときの頑張りによって、上がってくるときはちょうどいいところにいられるようになったりするわけです。むしろ自分たちがピンチのときに、もしこのチャンスを逃してしまえば、先輩の職人さんたちがリタイアしてしまえば再出発することはできませんので、やはり原点に戻ってみよう、もう一回文化そのものを大事にしていこうと思いました。

蔵の中は260年前の酒蔵なのですが、私が入社したころは、4人だけの蔵人、しかも、その4人の蔵人が40年間同じメンバーでチームワークを組んでいました。ものすごく丈夫なすばらしいチームだったのですが、なかなか若い人が入ってこれないような、隙間がないぐらいに丈夫な体制だったわけです。あまりにも魅力的だったので、この延長戦がなくなるんだということに非常に危機感がありました。後継者になりたいような若い人が入ってこない、やがてこの姿が消えてしまうのではないかということから、蔵の一部を開放して、中にレストランを作ったのです。完全なオープンキッチンになっていて、台所の360度周りが客席になっているので、台所に入った気分で、日本酒と和食を楽しめる場所になっていますが、ここのレストランを担当することになりました。

300年の歴史のあるところですから、1年間であせりを見せてはいけませんから、3年から5年をかけて、きちんと最後までやり遂げるところまでやっていけば、将来性が見えてくるのではないかとということからスタートしてみました。15人ほどの若い人を採用できるようになりまして、4月から11月はレストランのほうが忙しくなるのですが、冬の間は酒造りに力を入れて、若い人も励んでいけるようになりました。当時は蔵人になりたい人はいなかったのですが、今は逆に多すぎて困るぐらい希望者がいます。小さな蔵ですから、残念な

がら全員が思うようには蔵人になることはできませんが、今の若い人が10年ぐらい先輩の方々とともに仕事ができるようになったので、随分と力がついてくるようになりました。

お酒は高級酒もあれば一般酒もありますが、我が社では高級酒しか造りません。手作りのいい材料を選びながら、機械化されていない蔵ですので、「通い瓶制」をもう一度大事にしていこうではないか、自分たちの生き残りを図りながら、いろいろなところに販売するのではなく、直売のみでやっていこうではないかということになりました。造った物を一生懸命売らなければならないところではありますが、逆に、お客様の声を聞いていける体制が、フィードバックできることによってまた次の造りに反映できることもありますので、お客様に直接会社を支えていただくという体制になりました。

店の入り口に自動販売機が置いてあって、人が店に入ることなく外で用事を済ませてしまっていたのですが、「自動販売機をなくそう」と言ったらものすごく怒られました。社長から、「バカ言え、自動販売機だけが利益を上げているのに、なくしたら全部赤字だ。実態を知らないのにとやかく言うな」というお叱りをいただきました。

新入社員研修のときに社長に言われた言葉で今でも覚えているのが、「本当のことを言うとは怒ります。しかし、本当でなければ右から左にそのまま聞き流せばいい」というものです。外の人はどういう人がお客さんになっているのか、どういうニーズ、どんな思い入れで買っているのかということを知らないと、やがて別の機械へということになってしまいます。小布施でこの小さな老舗が残るためには自社製品をいかに作れるか、Only Oneの道が作れるのか。やはり長野県はかなりナショナルブランドの店が多く、最近はどうもナショナルブランドのところが支店とかいろいろなところを掌握してしまうような時代になったので、地域の力でいかにそこで作るか、そこにしかない魅力を自ら作っていくということが重要ではないかと思っています。

自動販売機をはずそうということを行ったときに、大体マイナスの発言というのは誰でも言えることになってきますので、ネガティブなことだけでは物事が変わりませんが、自動販売機をはずす代わりに通い瓶制だけにしていきましょう、リピーターを増やしていけるような体制にしましょうとか、あるいは自社製品を純米酒だけの酒にしようとか、何かをやめるときにはどうするのかということが大事になってきます。

どうするとそういう議論ができるようになるかということ、1カ月、2カ月経ってまだ「自動販売機をはずすべきです」と言っていると、最初はものすごく怒られたのですが、だんだん怒り具合が収まってきて、ただ「しつこいなあ」とか「頼まれてもないのに余計なお世話だ」と言われても、そこまで怒ってはいないわけです。それで、実は半年もしないうちに無理なく自動販売機をはずすことができました。

斬新なアイデアを出せば出すほど衝突します。むしろ、斬新でないときは衝突しないので、逆に人の反応がいいときは心配になります。「これでよかったのか」ということでもう一度考え直してしまうのは、あまのじゃく的なことかもしれませんが、むしろ引掛かるところがあるのはそこに何かあるのではないかと思ったりします。

注文が便利になったのは一方でいいこともあるのですが、挨拶もいらぬような町になるのは寂しいです。やはり、人間と人間のきずながいかにできるかがコミュニティの成立になりますので、すべてが便利になることだけが重要ではないような気がします。

それで、自分たちの酒蔵をやるとき、実は壁を壊すところから自分が有名になってしまいました。有名になるなんて夢にも思っていませんでしたが、自分たちでやらなければ予算がないので、自ら思うところに動き出すのは当然のことです。あるとき、大きな鉄のハンマーを持って壁を壊し始めたら、みんなは「まるで台風だ」と、壊してしまったら、あとは直すしかないところまでやったのですが、よくそこまで動きがとれたなあと言われました。

逆に、このままでは延長線がないところでいかに将来につなげていけるか、精一杯やってもギリギリ届くか届かないかぐらいですから、むしろできることを精一杯やったほうが納得できるし、できるかもしれないのにやらない、汗をかかないのに手を上げてしまうのは最悪だと思いました。

日本では老舗のプライドがすごく高いので、どこかが店を閉めると、そろそろうちのれんをたたんでもいいというお許しをいただいてしまったような雰囲気、20年前の長野にはありました。でも、これからの若い人がどんな日本を見つけていけるかを決めるのは、今、同時代に生きている私たちだと思います。地球の裏から発見できた喜びを持ったものを、どうにかして次の世代に届けてあげたいなあと思いました。ですから、やらないよりは、精一杯できる限りのことをやってみるのが当然のことだと思っています。

ただ、当時は、見える壁を壊すのは大変に見えても、逆に楽だったことに気付きました。見えない壁を壊すほうが、なかなか（壁が）消えないものもあります。

アナログの時代からデジタル化するのは、「これまではそういうことをしてこなくてもやってこれたから」とか、「今さらいらぬ」というふうに結構反対も多かったのですが、これからはいかにお客さんとコミュニケーションができるか、そして時間をつなげていけるようにしておくべきですので、管理をよりコンパクトにして、むしろおもてなしをできるようにしていきたいということもあります。

怖いもの知らずの20代、30代で思い切って走り出して、振り返ってみると「おっかなかったんだな」と、恐れるべきだったということが分かります。たぶんどんな地域でも、若い世代は未来が長い分、理想主義になりがちですが、

理想に向かって先輩の力も若い人の力も合わせていけば、かなり地域が変わると、(地域を)よくできると思っています。

あるところまでいろいろ改善してみると、「蔵部(くらぶ)」という名前のレストランは、蔵の一部と文化サロンでありたいという思い入れから「蔵部」という名前を付けたのですが、それは大正ロマンのような開かれた文化サロンだったのですけれども、そういう開かれた部分も大事なのですが、完全に開かれてないけれども少人数で勉強会を開くということが重要に思えるようになりました。

考えてみると、これは寺子屋的なことでもあるのではないかと思います。寺子屋では読み書き・計算だけではなくて、むしろ夢を持って生きること、生き様そのものが大事だと思うのです。この会はちょうど今週で120回を迎えますが、「小布施」と「セッション」という言葉を掛けて「小布施セッション」という名前を付けました。小布施の地名をなくしたくないということもありましたし、英語では「Obuse(オブス)」となかなか読み方が分からないところもありますので、「小布施セッション」で小布施を覚えてくれるのもいいのではないかと思います。

当時、10年前は、合併問題に責められた時代でもあります。小布施は今、長野県で一番小さい町ですが、この地名を絶対に地図からなくしたくないということもありましたので、民間も行政も学生も巻き込みながら一緒に磨いていこうと考えてやり出しました。

最初から学生は無料にしており、社会人もわずかな費用で参加できます。最初に1時間半のお話を聞いた後にパーティーがあるのですが、パーティーに参加するのは必要義務にしています。よく日本ではいろいろなセミナーが終わった後、すぐに帰ってしまうので、せっかく興奮したのに次の日に目が覚めたら何も変わらないということが多すぎます。先生の役割は種まきに過ぎなくて、むしろ本番はパーティーから始まるのです。その種がどうやって育つかは参加者の方々次第だと考えています。

また、地方でこれをやるのは非常に武器になります。一つは、地方は非常に親しみやすいところだからです。東京などのパーティーに参加すると、みんな3メートルぐらい離れた距離感があったり、声を掛けていいかどうか、誰かが紹介してくれないと変な人だと思われてしまうわけです。もっとも、(私は)変な人ですから、そう思われてもごもっともなのですが、でも、少なくとも地方ではなかなか出会いが足りないと思いました。魅力のある環境の中で生きられるのはいいのですが、知的刺激がもっとあれば、もっと生き生きして世界に羽ばたくような仕事が地方でもできるのではないかと考えました。

日本酒の酒屋ではありますが、あまり一生懸命いいものだけ造っていても売れる時代ではなくなりました。昔、日本酒の世界はビールのマイスターみたいななかたちで、造っている人は専門家で、飲む人はいただくだけみたいな感じで、

季節の喜びを失ったような気がします。むしろ、酒屋が単にものを造るだけではなく、もっと季節の喜びまで提案していけるような体制が必要ではないかと思いましたが、料理等の設定も大事だと思います。

言葉では「同じ釜の飯を食う」ということもあります。コミュニティの一つの背景は食べ物が大きいです。分かち合える生活文化や気候風土が同じなら、分かち合えるレシピも通じるものがあります。日本はかなり豊かになってきましたが、地域性の味わいは残念ながら文化から文明に走ってきているところがあるので、この地域のものだけになってしまうと狭いかもしれないですが、全部消えてしまうのも寂しいと思います。今日はお昼にきしめんをいただいてすごうれしかったのですが、この地域ならではの味が守られていくのは大事ではないかと思います。酒屋としてはそこまで考えないと怠慢ではないかと思うので、料理と酒のセットを考えると、もっともっと日本も世界に発信できる部分は大きいと思います。

「小布施セッション」はゾロ目の日に開催いたしますので、今度は7月7日の七夕ですが、早めに来ると今回はワークショップで省エネルギーのための行燈を作ったりします。また、せっかくの七夕です。浴衣で来ていただきたいと思っているのですが、今の若い人、特に男性は浴衣を持ってない人がたくさんいますね。同じ日の昼間にお会いした人も、夜に浴衣姿を見ると一段と神秘的です。その人の違った魅力が引き出せます。簡単に違いが出ることで、それほどお金をかけなくても気持ちで変えていけることもありますから、服装も大事ではないかと思います。

今の日本は、特に3月11日以降は、自ら元気を出して行って周りが明るくなるようにしていくことも大事ではないかと思います。ですから、こういうときは逆に華やかにしていきたいし、浴衣が売れているから作られ続けるので、買わないということはそうした日本が少しずつ消えてしまうことにもなります。

結局、自分たちは意識的にメーカー（maker）であるとともに消費者でもあります。自分はどんな日本と一緒に残っていきたいのかを考えて選択します。たとえば、このはんでんは絵染めで日本で仕立てているはんでんなのですが、注文をたくさんすればするほど職人さんが生き残っていけるわけです。

それから、「小布施セッション」は1月1日のお正月にはやらないのですが、ゾロ目の日に合わせて1月11日にやりますが、やはりみんな着物を着てきます。（「小布施セッション」では）着付けはやりませんが、自分で着られるようにはします。やはり自分で着れるようになると、そのときだけではなく、ほかのときにも着ていこうということになるので、パーティー、あるいはイベントではあるのですが、できるだけそのイベントがほかのときにもいいきっかけになっていけばいいなと思っています。

ぞろ目にしたもう一つの理由は、1月7日だけは違いますが、3月3日、5月5日、7月7日、9月9日とほとんどが五節句になるからです。古来からそ

の節句に合った料理が伝わっているのですが、今はほとんど誰も楽しんでいない状況にあります。たとえば重陽の節句には、中国から日本に菊酒と栗ご飯が伝わってきたのですが、菊酒と栗ご飯は小布施にピッタリだなあとと思います。菊の花びらをお酒に入ると非常に美しく、重陽の節句は9・9で一番大きい数字ですから、すごくおめでたい、喜びのあることです。喜びのあるものをなぜもっと日本人は分かち合わないのかと考えて、やはり自分たちから発信していった、どんどん全国にそうした習慣や文化が再び栄えてくれればいいなあと思っています。

桃の節句に桃の花びらを入れたり、花びらをお酒に入れるところはほかの国にはあまり習慣がないので、非常におしゃれな楽しみ方でもあると思います。ただ、古い伝統と文化だけで考えると、伝わってきたことを守るだけではどんどん狭くなってきますので、それを一つの参考にして、また広がりができるように、ほかのときにも提案をしていこうと考えています。4月4日の碧漪軒(ヘキイケン)の青いカクテルを北斎のアトリエにちなんでいたり、いろいろな冒険も許される環境にしています。

この「小布施セッション」は若い人が中心で、20代の若者が多いのですが、ドイツから来ていた私のベビーシッターは12回の「小布施セッション」に参加して、「こうした会はどこの町でも必要だ」と言っていました。若いうちから生き生きと、いろいろな考え方を分かち合っていけることほど大事なことはないなあと思っています。

信州とか小布施のような地方はまだまだ古い価値観があります。いい学校に入らないと、いいところに就職しないと、人生の道を外れてしまったような感じになるわけです。しかし、むしろ外れた道ほど、一生懸命自分に合った道を歩んだほうが、「すべての道はローマに通ずる」ということで、いずれはみんな同じところへ行くことになるのですから、自分に合ったやり方でいいんだということを知ってくれるとよりいいなあと思っています。

特に、仲間が熱い夢を持って自分の夢に向かって走っているのを見て、あらゆる分野の先端に立っている方々と直接触れ合って、その熱い気持ちが通じてくれるとうれしいなあと思っています。

この「小布施セッション」は今週でちょうどまる10年になるのですが、最初に出会った学生さんが今は家族に恵まれたり、小布施に就職する予定のなかった方々も随分就職するようになったり、最初お話をしていた図書館の館長も、「小布施セッション」がきっかけになって、東京にいたのに小布施に家族と移住するようなかたちになったりして、非日常は日常を引っ張ってくる力になるんだなあと思っています。

今日は、今日のためだけの今日ではないのです。むしろ、皆さんのnext stepの踏み台につながる今日だと思っています。結局、この「小布施セッション」がきっかけとなって新しい会社を二つ起こしたり、「小布施見に(ミニ)マラ

ソン」を起こすきっかけにもなりました。

最初に「小布施ッション」をやり出したころは、こういうことまでやろうとは思っていませんでした。「犬も歩けば棒に当たる」ような、いろいろな出会いがあることからスパーク (spark) が生まれてきたり、本当に走るのが好きですから、少しでもその喜びをほかの人とも分かち合いたいとか、あるいは一緒に働いている方々で、80歳代とか70歳代の職人さんはかなりタフなのですが、若い人は頭が固くなくても体は柔らかくないということで、もう少し柔軟性を取り戻すためにも汗をかく喜びを覚えるといいなあと思っています。

また、「海のない小布施に波を作ろう」というテーマで、今年は「波」と言うのは少し控えようと思っていますけれども、(マラソンで)「大波賞」とか、トップ団体賞の名前まで変えてしまう年になりました。北斎も江戸時代に大波を描いたり、小布施の祭屋台に描かれているのですが、自分たちは北斎と同じ波を作ることは不可能ですけれども、時代の流れにこれだけ大事なものを流してしまっただけだと思いません。

そのためにはもっと尽力が必要で、小さな町も、そこにいる方々も、内部・外部ももっと巻き込みながらやっていければいいなと思いました。最初は少ない人数で21キロのコースをやるならどこかあるのかということ、先輩と若い人とともに考えました。先輩は若いころにやりたかった夢を提案したのですが、警察がだめだと言ったためにできませんでした。しかし、必ずその夢を持っている先輩がいますので、若い人と先輩の方々とともに、「意志あるところに道は開ける」ということで、当初はかけ橋を作ることになったのですが、提案した日から実現するまではたった3カ月でした。4月20日に提案したものが、7月20日にはもう走り出すようなかたちでした。

最初に提案したとき、40人ぐらいのメンバーを呼んで「やりましょう」とお願いしたところ、1人の先輩に「お金がない、時間がない、警察は許可しないから、話をしても意味がない」と言われて、みんな帰ろうということになって帰ってしまったのです。それでも、できない理由が100あっても、できる道が一つあればできるのではないかと、できる道と一緒に見つけていこうということからやり出しました。

それで、できるだけクオリティの高いものをやりましょうと、仮設的にやるからといって、決して中途半端にはしませんと。たとえば江戸時代の北斎の天井絵に描かれている祭屋台は貴重なもので、世界から見てもとても大事なのですが、同じものはできないにしても、中途半端なことだけは絶対にしないと、やる以上は思い切ってやろうということに決めたわけです。

私はデコボコの道は大事だと思っています。人生はスムーズな道ばかりではありません。むしろ、デコボコがあるからこそ退屈をしないということもあります。近くにPTAの「危険です！走るな」というような看板があるのですが、私はむしろ若いころは思い切ってデコボコの道をたくさん走ったほうが、けが



をしない人間が育つようになってくると思います。町の中が病室みたいなかたちで、全部段差がなくなるのはかえって危険ではないかと思っています。

とにかく、オフロードの普段着の小布施をもう一度見直していこうではないかということから、たとえばスポーツ選手だったと言いつつも、決して世界一速い選手ではないし、何かやるためにやっとできたことですので、普通の人の何倍も喜びがあります。

私は学生のころ、富士山のとっぺんまでのハーフマラソン大会にも出ましたが、ちょうど富士吉田の市役所からスタートして、8合目を過ぎたところで時間制限で止められてしまいました。そこで、番号をはずして「行かせてください」と言ったら、「だめだ」と言われて、そのとき日本語能力が足りなかったのかどうかは分かりませんが、そのまま涙を流しながら帰ってきました。

小布施はやはりできるだけ多くの方々の夢が実現できる町でありたいということから、最後の人がゴールできるまで、絶対に手をたたいて暖かく迎えていきたいと思ひ、ハーフマラソンではあるけれども、5時間の時間設定にしました。誰でも、走っても歩いてもゴールできる大会にしていきたいと思っています。現実には99.7パーセントの完走率になっています。去年の真夏に開催して、大勢の人が実際に走ったのですが、途中でリタイアしたのは29名だけでした。

最初の3カ月で立ち上げた大会は、許可を得るよりはお許しをいただくほうが楽なこともあります。結局、警察へ毎日のように通ってコースを提案しました。それで、「だめだ」と言われて、どこがだめなのかを聞いて、持ち帰って調べ直してまた提案し直すと、「そこはOKだけどここがだめだ」と言うわけです。まとめて教えてくれれば良いと思うのですが、30回ぐらい行ったり戻ったりして、10回目ぐらいに行ったときには、「難しいと言っているのになぜ分からないのか」と言われました。

難しいのは承知です。でも、「難しい」イコール「可能ではない」といいますが、「難しい」イコール「difficult」、困難があるということなのです。それで、大会の2週間前になると、結局このまま大会の知らせをしないと誰も走らないので、ポスターを作って、申込書を印刷して配ったら、何と800人の参加者がすぐ来るようなかたちになって、警察に呼び出されて「けしからん。まだ許可もしていないのに何するんだ」ということになりました。

だけど、考えは動かないと止めやすく、止まったままだとすぐにふたを閉じられるのですが、前向きな流れを作ってしまうと、同じエネルギーではとても止められませんので、流れを作ることです。1歩踏み出して、2歩踏み出して、3歩踏み出してみるの大事ではないかと思っています。

結局、警察が条件として出したのは、「自治会の全員にはんこをもらってきてください」ということでした。小布施には28カ所の自治会があるのですが、先輩と若い人がペアになって自治会の方に説明しに行くと、すごくいい話なの

で反対する理由もありませんから「やりましょう」ということになるわけです。でも、今は簡単に言っていますけれども、そんなに簡単なことではありませんでした。むしろ、「俺たちに責任を取れと言うのか」と、「はんこ」を押してほしいだけなのに、かなり「はんこ（反抗）」されたということもありました。

それで、1回だけではかみ合わないので、大体同じ人のところへ何回も行くことになりました。みんないい具合にOKしてくれると思っていたのですが、自治会のミーティングをやってみると1人だけガミガミと反対する人が出てきたので、みんなシーンとなって目を合わせないようにしていました。それに対してプラスのことを言うと、後で自分のところに「江戸の敵を長崎で討つ」というようなことがあるといけないので、みんな遠慮してしまったわけです。ですから、言うほど簡単ではありませんでした。

ただ、自分たちの子どもたちがよりいい未来を作っていくために、(今は)地方までも大都市化されているようなところがあって、隣の人の名前も知らなければ、挨拶もしなければ、万が一のことがあった場合は本当にお互いに見守ってくれるのかと思うわけです。道もその町の景観そのものになります。

それで、警察から、「大会をやるなら3時間に妥協しなさい」と言われたのですが、「そのような妥協はできません」と言ったわけです。速い人だけしかゴールできない大会は寂しいので、普通の人でも同じ距離を歩んでいけるということが大事ではないかと、自信を持ってない人たちが少しでも自信を持てるような、一歩前向きな成功例ができるとそこから変わると信じていますので、むしろ自信を持ってない人たちのための大会にしたいと思うのです。「妥協してはならないのが安全で、妥協しなくていいのが時間です」と、生意気なことを言ったりしました。

それで、警察が困ってしまって、私が日本語が分からないということで社長も呼び出されて、「それはだめだと通訳してください」と言いました。でも、社長は幸い、「セーラの言うとおりでと思います」と答えてくれたので、全く困ったものだと思われたのですが、最後にはやることになりました。

ただ、5時間でやるのはいいのですが、今度は2倍の数のボランティアをそろえなさいと言われました。朝早くから拘束するとボランティアは大変なのです。走る人の限度はありますが、いつか走る人の数ぐらいボランティアがいる大会になればいいなあと思っています。今は1500人ぐらいなのですが、ボランティアの熱い応援が人を運んでくれたというような思いで走っていただければうれしいので、それを実行しました。

でも、こういうことを思っているでも、安全を守るだけでやっとだったので、とてもスポンサーを探す余裕はありませんでした。何かをやりたいと思ったときは、自らがスポンサーになることを覚悟しないとできないし、まして私は手続きが最も苦手なので、補助金などは対象にしています。手続きばかりに目がいってしまうと、目標に向かって走るべきところが、手続きで80パーセント

ぐらいのエネルギーが取られますから、本番で20パーセントぐらいの力しか発揮できなくて困るわけです。ですから、この大会を立ち上げるために、何年か講演収入を全部この大会のために注いでやってきましたが、やっと今年から(収支が)とんとんぐらいになりそうです。

事務局の費用はボランティアでやっていますので、事務局の費用まで入れたら相当まだ赤字なのですが、今年はチャリティ大会として開催することを決めていますので、何とかうまくいけば500万円ほど東北の赤十字に寄付ができると思います。目標は高く設定することが大事です。低い目標は目標にならないと思うので、そこまで本当にたどり着けるかどうかはまだ分かりませんが、できるだけ近づけるようにしていきたいと思っています。

この大会を始めたときはここまで盛大な大会になるとは思ってもいませんでしたが、今では8000人ほどが走る大会になってきました。そもそも小布施の人口は1万2000人ぐらいしかいませんので、沿道で応援する人まで入れると、町の人口以上のものが動き出す日になります。目標は高く設定しますが、自分にとっては、1人のためでも違いがあれば十分にやるべきことですので、気持ちの上では安全に、誰かのためになればそれでいいんだと思っています。

私の生まれ育った都市でも1週間町をふさぐことがあるのに、私がお願いしていたのはたった5時間だけです。警察から3時間に妥協しなさいと言われたときに、半日だけではなく、半年ぐらい工事のために道が通れないこともありますので、それに比べればほとんどの人が寝ているうちに終わってしまうぐらいのことです。最初この大会をやるときには、「そこまでやると逮捕されるかもしれないよ」と警察に言われたりしたこともあります。この日本できずながつながっていればお互いに守り合うことができます。今、やっと若い人と先輩の共通の話題ができたり、誇りを持ったり、ボランティアの帽子とTシャツを着ていると、一つの共通認識が生まれてきます。たぶん、大阪では阪神タイガース、名古屋では中日ドラゴンズというように、自分たちはプロスポーツ選手ではありませんが、各グループはそれぞれ一生懸命やっているのですが、一つのアイデンティティとして合わせることもきっと大事ではないかと思えます。

最近をよく、農家の人たちが作業をするときに、マラソンの帽子とかTシャツを着てくれたりしますが、たぶん誇れるような共通の経験ができることが大事ではないかと思っています。

ただ、真夏の大会を果たしてやるべきかどうか議論になることがしばしばあります。私は最初から夏の暑いときにマラソンをやるというのは、むしろオリンピックの大会はいつも真夏にやるので、日本人はマラソンがこのごろ強くなっているのは、真夏に練習していることもあると思います。春と秋は大会が集中しますし、冬もありますが、冬の大会は走る人だけが温かいけれども、応援する人は寒くてたまらないので、夏の最初の3連休のまだ旅に出ないぐらい

のとき、学生やお父さんやお母さんたちもたくさん参加できるときにやります。

今、1500人のボランティアのうち500人ほどは、小学生、中学生、高校生が参加しています。暑いけれども、暑いときの熱中症対策として、十分に給水をするなり、十分に塩分を取るという大切さを覚えてくれます。また、もし体調がおかしくなったらどのような症状が出るのか、自分の健康管理について、むしろこの大会がなければそこまで学ぶ機会に恵まれなかったというような大会であればいいなと思っています。

逆に言えば、楽なときに大会を運営すると、おそらく500人ぐらいのボランティアで終わってしまうのではないかと思います。厳しい時期に合わせてやるから、それだけ大人数の協力体制が必要になるわけです。

また、来年に向けて全員の必要義務としては、心臓マッサージなどを覚えていけるような体制を作っていくことです。大体人は救助が必要な場合は3分以内が大事ですから、どうしようと思っているうちに3分なんてすぐ経ってしまうので、すぐに動けるような体制や当事者意識を持つようにしていきたいと思っています。たった1日のスポーツ大会ですが、こうしたことがもっと日常的に守られる体制につながってくればいいなあとと思っています。

また、普通に練習しているときに土手とか森の中を走るのはいいのですが、大会では路地を走ったり、普段着の人の生活空間を通ったときに誰かが手をたたいてくれることがうれしいので、普段着の小布施の町を通ったり、23カ所で生演奏がありますので、やはりスピードを競うことよりも楽しく走るほうが大事だと思います。

私自身が陸上部に所属していたこともあります。あるとき若い人のための大会があったのですが、陸上部の人が一生懸命走っているとき、側路で練習している部活の人が誰も手をたたこうとしなかったのを見て、寂しいなあと思いました。自分が関係ないところでも、頑張っている人の姿を見たら、「頑張れ、頑張れ」と応援できるような町でありたいなあと思ったので、自分にとっては、本当に小さな違いができることのほうが将来的にはもっといい町につながるのではないかと思います。

私は言葉のシャレが好きなので、ミニサイズの町ということで「ミニ（見に）マラソン」と名付けました。「ハーフマラソン」と付けてもよかったのですが、決して「はんぱ」ではないので、ミニサイズの町をもう一度見直していこうではないかというふうに考えてやっています。

「小布施見に（ミニ）マラソン」は、口コミで女性に人気ナンバーワンの大会に選ばれて、4割ぐらい女性の参加者がいます。普通の大会は女性の参加者は10パーセント以下のところが多いのですが、初めての方もたくさんいらっしゃいますので、それがきっかけになって、そこからいろいろ楽しんでいただければと思っています。

話題を変えますが、小布施も全国平均より早く高齢化が進んでいます。たぶ

ん、20年ほど前に65歳以上の方は20パーセントを超えていたのですが、やはり一人暮らしの方が増えたり、一番高域なところに手が回らないところもあります。行政は道路の雪かきは一生懸命やるのですが、歩道のほうまではなかなか手が回りません。手の回らないところは毎日やるべきところですが、毎日だとできませんのでできるところからやろうではないかということから、簡単なことですけれども、2週間に1回「1530（市ごみゼロ）」運動をやろうとか、さびた看板をはずそうとか、真夏でも雑草が生えてこないように、道側にある砂を片付けておくということをやっています。

たぶん、皆さんも朝早く起きると、どこの町でも5時とか6時ぐらいに、先輩の方々がほうきを持って一生懸命道を清掃している姿を見かけると思います。でも、その人たちができなくなると、誰もしなくなってしまう。背景としても、子どものころは先輩と若い人が協力し合っているところは当たり前にあったのですが、残念ながら日本ではシルバーの方々と同じぐらいの年齢の人と固まってしまったり、若い人も同じぐらいの年齢の人と固まってしまっています。お互いに学び合えることや刺激を受けることが多いので、もっと市民共同で協力体制ができれば一番面白いと思うのですが、そういうことをやり出しています。

最初は道だけを考えてやり出したのですが、今は、20代の若者が中心メンバーとなってやっています。私には1歳9カ月になる息子がいるのですが、町にある公園に連れていくと、よく子どもまでゴミを拾っています。空き缶や割れたガラスなど、子どもが拾うと危険な物がたくさんあるので、やはり大人たちももっとそういうところも面倒を見ていけるようになると、全体的に町の質、生活の喜びが上がると思っています。

神社の近くに子どもの遊ぶ場所があるのですが、すべり台が汚いから子どもたちは使わないのです。洗っておけば問題ないことですので、そうした目が届かないところに気づくと、子どもも意識が変わってくるように思いますし、大人も変わってくるように思います。

2年前の講演収入を道路の掃除機を購入するために使ったのですが、ドイツ製のすごくかわいらしい道路の掃除機です。どうしても高齢になると腰が痛くなることもありますので、かわいらしい車にっこりしたり、目の前の町がよくなっているんだなあ、と、吸い込まれそうで楽しいのですけれども、そういうものを動かしたりしています。

でも、それも許可を得るのに、警察と建設事務所と3カ月ぐらいもめなければならなかったのです。免許も持っていますし、きちんと車にプレートも付いているのですが、道路の白い線の中に入っていたので新聞の記事になってしまいました。免許を持って走る場合、その白い線の中に入ってはいけないということでした。私は知らなかったのですが、日本では知らないでは済まない、日本の法律に従いなさいと、外国人であるだけになおさら厳しく言われたのかも

しれません。

でも、それも今の法律の中でできることで、最後は県警の本部長のところまで話が上がって許可を得たので、もし皆さんがやろうと思ったら「小布施に例がある」ということで、皆さんはそこまで苦勞をしなくても済むかもしれません。

いろいろなことをやり出してみるといろいろな壁にぶつかり、また、いろいろな大変さを覚えます。県にある道路の掃除機は5トン車がたくさんあって、自分の頭よりホイールが高い巨大なスケールのおっかないものなのですが、やはり5トン以下のものがほしいと県に要望しまして、1トン車を買うことになりました。そして、それをボランティア団体に貸し出すようなかたちになったのですが、1回目に貸したときに故障してしまいまして、ボランティアでやっているにもかかわらず20万円の修理代がかかりました。もし何千万円する機械が壊れて、自分たちがそれだけ請求されてはたまらないと、まして、行政のところで壊れたのですが、普通民間が直すと2万円以下の修理代で済むものが、なぜか行政がやると高がついてしまうわけです。

前向きに走れば走るほどいろいろな壁にぶつかることにもなります。痛い思いをすることにもなります。授業料が高くなることもあります。でも、それで気を曲げずに本来の目標に向かって、また、信念を持って進んでいく必要があると思います。結局、いいことをやればやるほど、賛成する人も出てくれば反対する人も出てきます。100パーセントの人が賛成するというのはあり得ないことですので、同じ考えに全員がなる必要はないと思います。私は日本に来た以上は目立ってしまうので、目立つ杭がたたかれるならば目立ちすぎると手が届かなくなるんじゃないかと、足を引っ張られることがあっても、相手にストレッチをさせているという気持ちで、自分の可能性や忍耐力を伸ばして下さっているんだということで、いやだと思わないで、むしろありがたいと思っています。

私は昔、野球部に所属していたこともありますが、キャッチをするときに、そのままキャッチすると痛い思いをしますが、受けながらやると痛い思いをしなくてもいいわけです。合気道でも同じで、衝突すると痛いけれども、前向きなエネルギーに変えていけば、むしろいけないと思ったことはプラスに変えていけると思います。やはり最後は、どんな分野で頑張ろうと思っても必ず壁にぶつかるし、また、リーダーになればなるほど風当たりが強くなることは当然のことでもあります。

私の場合は、風当たりが強いときはむしろ生きているんだなあという感じがしますし、風当たりがないときは、もしかして自分もぬるま湯に浸かっているのではないかと逆に危機感を感じます。頑張ろうと思えば必ず大変なことにも遭います。でも、その大変なことに遭ったときは、工夫してどうやったら乗り越えていけるのかを考えると丈夫になると思います。ですから、

againstがあるたびに人は強くなりますので、ここまで力がついたとすれば、自分の力よりも相手がたくさん鍛えてくださったことのほうが大きいのではないかと思います。

ただ、せっかく地方には本当にすばらしい文化もあれば、面白い人もたくさんいるのですが、このごろ高齢化社会が進んだり、若い人が少ないので、女性としてできることは、よりたくさん子どもを生むことだと思います。それに気付いたのがちょっと遅かったのですが、あと1人か2人生みたいと思います。そして、若者がより子どもに恵まれる環境作りにチャレンジしていきたいと思っています。

ちょっと話は変わりますが、今年の夏、8月8日に地瓦を復活する予定でいます。この蔵部を造るときに瓦が不足していたので大変困ったのですが、そのときに「古い瓦ではなく、新しい瓦を使いなさい」と言われました。どうも古い瓦と新しい瓦では質も雰囲気も全然違うので、「古いのが出てくるまで待ちます」と言ったのですが、現場の監督がどんなに職人さんに説明しても納得してくれなかったので、直接職人さんに会って話をしてもらいたいと言われて喜んでお会いして説明すると、その職人さんも納得してくれました。

それから1週間も経たないうちに、親切なご家族が、ちょうど3カ月後に解体する予定の家屋の瓦を提供してくれました。そのときは3カ月も青いビニールシートをかけて暮らしてくださったのでギリギリで間に合ったものの、20年、30年も経てば古いものがほとんど出てこなくなってくるので、今のうちに復活しておかないと間に合わないに違いないと思いました。

幸い、そのときは「小布施ッション」をやり出していたころですので、「瓦を焼きたいのですが、やりたい人はこの指止まれ」と発信してみると、すぐには誰もいませんでしたが、「探しても見つからなければ育てればいいんだ」というふうに考えました。やがて、3人の若い人が手を挙げてくれて、今はその人たちが中心メンバーとなって新しいプロジェクトを進めています。

私がこれまでいろいろなことにチャレンジできるようになったのは、そうしたチャンスを与えてくださったので今日があると思っています。ですから、少しでも若い人にチャンスを広げて、もっと応援できる体制を作っていきたいなあと思っています。

今、地方で一番困っているのは、農家の後継者不足だと思います。また、東北でもしばらく（農作物を）作れなくなってしまっているところが多くなっています。国の力として、食べていける力が重要で、食べていける上で冒険ができるので、それは基盤そのものだのように思います。それで今、休んでいる土地や荒地だったところを借りて耕そうとしています。13年前に蔵の再構築をするときは若い人の希望者がいなかったのですが、受入体制を作ることによって希望する人が現れてきたので、農業も受入体制を作っていければ、また、人を雇えるような体制になれば、かなり希望する人は多くなるように思います。

時間が迫っているなので全部はお話しできませんが、「榎一客殿（ますいちきやくでん）」というゲストハウスを5年前にオープンしました。これは「小布施セッション」がきっかけで出会った若者が最初のプロジェクトとして作り上げた宿泊施設で、12部屋だけの、土蔵や蔵の中に泊まれる小さなホテルです。

古い民家に住まなくなってしまったのは、やはり生活のあり方が変わったからです。たとえば1階と2階の間のプライバシーを守りたいとか、音が聞こえないようにしたいとか、あるいは夏は暑かったり冬は寒かったりするわけです。それで、ペアガラスにしたり床暖房にしたり断熱をしたりして、非常に古い建物も再利用すると快適な暮らしが可能だという、一つのショールーム的なものにしていこうということで、今、3人の若い人たちが瓦を焼いたり土壁を守ったり、建築の資格も持っているので図面を引きながら、古い伝統と新しいテクノロジーを加えるようなかたちにしています。

あとは、農業のために、今はボランティアを受け入れる体制にしています。日本人も外国人も受け入れています。二つの世界的なボランティア組織にホストとして登録しているので、海外からもよく来ます。4月の時点ではガクンと誰も来なくなりましたが、幸い、5月からまた復帰し始めて、今、少しずつではありますが海外からも再度人が来るようになりました。

自分たちの酒造りの蔵や蔵部などへ、去年は冬の間には2000人ほどの西洋人に来ていただき、ご利用いただきました。今年はまだどうなるの分かりませんが、こうしたときは、やはり力を合わせて頑張ると必ず乗り越えていけると思いますが、もう一度本来あるべき日本の姿を考えて、汗をかいてそれに向かって走れば必ずいい方向に動けると思っています。今、若い人をたくさん採用して、若い人がこれから先頭に立って走れるような体制にしていきたいと思えます。

「強い思いとつながる力」ということがテーマなのですが、しっかりと信念を持ってやるのが一番大事ではないかと思えます。「つながる力」は、必ずしも自分の力だけが万能ではなく、むしろ周りの人が自分の足りないところを、異文化交流のチームをいかに作っていくか、diversityが大事ではないかと思えます。

私の場合は、大学時代に日本にやってきたときに、日本にはいろいろな面白いものがあるのになかなかすぐには出会えなかったり、すぐに入っていけなかったり、試しに入ってみるとずっと最後まで入っていないと怒られてしまったり、少しずつ味わって自分に合ったものを探し出すのが難しかったのです。社会人になって「小布施セッション」みたいないろいろな考えを知るチャンスを作っておくほうが、お客さんは帰った後でもいろいろな分野の考えをより知っていたら、世界が広がるのが一番人生の喜びに、生きる価値にもつながるような気がします。ですから、自分が大事に思っている以上は、少しでも踏み出して、少しでもそれに近付けるように努力していこうと思っています。



葛飾北斎も招いた、この会社の当主 高井鴻山が好きな言葉が「知行合一」だったので、「知」は考える、「行」は行動、「合」は一緒、「一」はひとつ、考えと行動がなるべく一つに近付けるようにということです。陽明学から来ているのですが、私を書くとき左利きですので、「合一」という字を一つにすると榭一の宿にピッタリということです。

自分たちは今、どこに立つべきなのかということは、昔を知ることによって必ずヒントがあって、これから未来に向かって走るべきことが見えてくるような気がします。私は日本に生まれ育ったわけではありませんので、背景がなかっただけに、今の先輩の方々がある時代のことはよく知っていても、その前はどうかだったかともっと長い間で考えてみると、必ずこの地域にあるべきものが見えてくるような気がします。

質問の時間も用意したほうがいいということですが、私は物事を始めるのは得意ですけれども、終わらせるのは苦手な分野ですので、まだ十分ではないような気がしますが、このあたりで終わりたいと思います。

本当は、日本酒があればもっと活発な議論が始まるような気がしますが、ぜひ皆さんも、家に帰ってから乾杯していただけたらうれしく思います。

ご清聴ありがとうございました。

**司会：**セーラさん、ありがとうございました。

それでは、限られた時間でございますけれども、会場のほうからご質問をお受けします。

**質問者 1：**今日はどうもありがとうございました。

10年ぐらい前に私は『セーラが町にやってきた』という本を読みまして、「すごい人がいるんだな」と思ったのですが、今日、実際にお目にかかってお話を聞くことができました、どうもありがとうございました。

交換留学生で日本に来られたとき、ご両親がかなり反対された。現在のセーラさんを見られてご両親はどのように思われているのでしょうか。

最初に妙な日本人に会ったがために日本に根付いてしまったと思っておられるのか、そのあたりはどうなのでしょう。

**セーラ・マリ・カミングス氏：**そうですね、面白いことに、若いころから親に「自分の道は自分で考えなさい」とずっと言われ続けたのですが、初めて自分の道を考えてときは「だめ」と言われたので、「違うじゃないか」と思いました。でも、1年間はやはりホームステイ先の家族と一緒に住んで、娘のようにかわいがっていただいたり、周りの人に随分手助けをしていただいたり、非常に親切にいただいたことによって、自分の目を通じて日本を知ることができたので、逆に日本に就職するのは非常に賛成してくれました。

ただ、1年間経ったころ、今の榭一の関連会社が和菓子を作っていたこともありまして、オリンピックの仕事より栗菓子の仕事に入りたと言ったのです。

当然、日本でもアメリカ人がなぜ和菓子屋に必要だろうかということは不思議に思われるし、親がオリンピックよりなぜ栗菓子なのかピンと来なかったこともあると思いますが、自分が選んだ道ならいいということでした。

今日はお話ししませんでしたでしたが、たとえば日本で先輩の職人さんと木桶仕込みを50年ぶりに復活して、今、その運動は100社まではいきませんが80社ほどで木桶仕込みを復活する運びになったりして、本当に大事なことをつなげていけるようになってきていることに、親も「よかったなあ」と思ってくれています。

ただ、やはり原発があったりして、「子どもは大丈夫か」とか、「私はここ（アメリカ）へ帰ってこなくてもいいけれども、孫は送りなさい」ということを言われたりします。今もまだ福島周辺は危ないですが、日本がまだ10キロとから20キロぐらいのところを（避難地域だと）言っているときに、アメリカからは80キロ（以内）は行ってはいけないというアドバイスがありました。しばらくこの問題は安定しないので、2～3年は時間がかかると思います。

これだけの激しい震災に遭うのは日本にとっては初めてのことで、どの国にとってもかつて経験のないような大変なことだと思います。原発の問題も津波の問題も、地震の問題もこれからまだ余震が続きますのでなかなか大変なことです。

しかし、私は「災い転じて福となす」を信じています。大変な中でも人のために世話をしあげたり、自分がすべてを失ってもまだ人のために手助けをしたり、海外にも随分日本人の心の本質を、ほかの国ができないことを日本はやって見せています。かなり世界に向けてのグッドウィルが、日本に対する尊敬や理解で、苦しみの中でも今でも日本のために祈り続けている人はたくさんいます。このような大変なことになったのはコントロールできなかったのですが、これから立て直すチャンスにもなりますので、本来大事なものをより大切にしようかたちになってくると思います。

ですから、両親もしばらくは会いに来てくれないかなあとありますが、賛成はしてくれています。

**司会**：お時間の関係もありますので、あとお一人だけにさせていただきます。

（二人手があがった）

**セーラ・マリ・カミングス氏**：早く答えますからもう一人もどうぞ。

「小布施セッション」のときは、一方通行の話よりも、質問がたくさん出るのが一番うれしいのです。

**質問者2**：今日はどうもありがとうございました。

もう一つの「つながる力」ですが、セーラさんの『セーラが町にやってきた』の中でも本当に一流の人たちが協力しています。この場合も協力してくれるかどうか分からないけれども、とにかく行ってぶつかって分かってもらおうと。今回でも、警察の人などが最終的には協力してくれたということでした。そういう本質をつかむというか、人を動かすときに大事にしていることとか、妥協せ

ずにそれは違う、ここは譲れないみたいな本質をつかむ力というのはどうやって培われたのですか。あるいは、もともと持っているものなののでしょうか。

**セーラ・マリ・カミングス氏**：たぶん3番目に生まれたので、4人兄弟の3番目はほったらかしにされることがあるので、いつも「ゴーイングマイウェイ」ということで生まれ育ちました。また、私が若いころ、エネルギーがあふれていて暴れん坊だったときに、親に「走ってこい」と言われると、ぐるぐる、ぐるぐる走るといつの間にかマラソンをやっているとかそういうこともあったりして、どこまでが生まれつきで、どこまでが途中で身につけたのかは分からないのですが、自分にとってきっとマラソンをやっていることは大きいと思います。

というのは、壁にぶつかるのは当然であり、ぶつかったときはあきらめない、粘り強く時間をかけて、右・左・右・左とやり続ける。結局、本当はすごく優れた一流のデザイナーがいても、プロジェクトに燃えなければ最高の仕事はできませんので、夢と一緒に分かち合える人を見つけようとします。その夢を分かち合えるタイミングが合ったり、タイミングが合わないと、やはり調整しながらやっていく。最初はこちらでやろうと思ったけれども、できないとまたちょっと調整しながらやるわけです。でも、たぶん、セレンディピティ (serendipity) の力もあるのではないかと思います。アンテナを張ってこの方向を出したいと思うと、最初に向かっていたところにはたどり着かないかもしれませんが、何かしらに当たってまたつながることがあります。

私の名前は「カミングス」ですけども、よく「ゴーイングス」だと言われたりして、あまりほめ言葉ではないなあと思うのですけれども、良くも悪くも自分は自分だと思っています。何かをやっている最中にけんかになって、衝突すべきだったこともあれば、そこまで必要でなかったときもしょっちゅうあります。若いころは特にそれを見極めることができなかつたので、いつもけんか、けんかだったのがちょっと損してしまっていたところもあります。でも、何でも流してしまうのもいけないのですね。「いい (良い) 加減」のところはなかなか分からないので、「いいかげん」なのでしょう。

**質問者3**：今日は本当にありがとうございました。

セーラさんは非常に生き生きとしたスマートな女性で、本当にすばらしいです、感動しています。そんなセーラさんですので、端的に一つだけ質問します。

日本という国を選んだことを後悔しているとか、間違ったなあという思いはないのでしょうか。本当に日本でよかったなあと思っていますでしょうか。

**セーラ・マリ・カミングス氏**：はい。私にとっては最高だったと思いますが、ただ子どもができる、子どもにとってはこれでいいのかと、これからどうやって育てていけばいいのか、どんな教育をしていけばいいのかと思っています。自分が生まれ育った大学の町は、周りに州の中でも一番高いレベルの学校がありました。私の子どもはアメリカの国籍もあれば、日本にも永住権を持ってい

る子どもになります。いずれにしても、日本の文化はものをみがく、細かいことも大事にする、整理・整とんの重要性を大事にするというところがありますが、アメリカは大きいだけに、私も含めてちょっと乱暴すぎるところがあると思います。日本はやはり細かい部分に気を遣うところがあって、たとえばお手洗いに行くと、日本だとトイレトペーパーが落ちていませんし、むしろ三角に折って次の人が使いやすいように丁寧にしておくとか、そこまで気を遣います。ささいなことですが、実は結構生きる価値があるように思います。

ですから、私の子どもには日本のその心を持って育ててほしいし、アメリカのいいところも持ってほしいと思うので、生き生きと行ったり来たりできるようなかたちができればいいかなと思っています。

まだ日本だと、特に地方にはインターナショナルスクールは少ないですし、やはり見た目が違うとなると、いじめ問題が出てくるとか心配ではあるのですが、大体今は日本人でも優れた仕事をしている人は、たいてい若いころにいじめられていたといいます。ですから、それを乗り越えていけるとより丈夫になってくると思います。

簡単に答えを言うと、私は日本を選んで、今も命をかけて、死んで骨を埋めるつもりはありませんが、日本にすべてをかけてもいいと思っています。

**司会**：ありがとうございました。

それでは時間になりましたので、まだいろいろお聞きになりたい方もいらっしゃるかと思いますが、今日はここで終わらせていただきます。

セーラさん、本当にありがとうございました。

**セーラ・マリ・カミングス氏**：ありがとうございました。